

タロットカードは Death



mikatuki98

さっき彼女が苔丸神社で参拝をすませた後に引いた〈おみくじ〉は、中吉だった。しかし小でも中でも大でも、彼女にとっては関係ない。ただ一つ、彼女が知りたいのは恋愛運だった。

「【恋愛運：真実の愛は無い】か…… ま、そうかもね」

半年前から始まった深夜のラジオ番組のナビゲーターにのめり込んでいた彼女は毎週、手紙・ハガキ・Faxそしてメールと、ありとあらゆる手段でリスナーとしての存在をアピールしていた。但し、ペンネームを使い、年齢不詳で通している。

彼女は今年28歳。微妙なお年頃だ。周りの大人たちからは、いい加減結婚は未だかと突かれる。だけど、今彼女が夢中になっているのは今年デビューしたてのアーティストで、いわゆるシンガーソングライターとやらだ。どんなに想っても現実になる筈も無い相手。いや、彼女自身もハナから現実にしようなんて気はさらさら無い。しかし恋心と言うものは可笑しなもので、彼女の行動を不自然にするのに充分だった。

彼女が参拝した苔丸神社は、別に縁結びの神様でも何でもなければ、いつもお世話になっている氏神様の神社でもない。ただ〈ある場所〉を訪れる為にこの街に来た時だけ、〈ある場所〉から近いという理由で立ち寄るまでのこと。そして神社参拝の目的も信心深いからと言うのではなく、〈おみくじ〉を引いて【恋愛運】を知りたいだけのことだった。

「真実の愛か…… あったら凄いよね。でも彼ってホントのところ、わたしのことをどう思ってるのかなあ〜？」

彼女がいつものように考え事をしながら、街中の小さな雑居ビルの狭い階段を上がっている途中、二階にある美容院の店員と目が会った。

「あ、しまった！ 目が会っちゃった…… ココを通るって事は、占いの館に行ってるのがバレバレだもんなあ〜」

彼女が向ってる場所は、美容院の上にある三階の〈占いの館〉だ。美容院の入り口がガラス張りなので、二階から三階に上がる時、必ずそのドアの前を通らないといけない。もう何度も通っている彼女は、きっと顔も覚えられているに違いない。

「なんか嫌だな……」

だけど、彼女は今月も既に二度目の館訪問だった。

お気に入りの占いはタロットだ。猫耳の飾りをつけた顔色の悪いお姉さんが、シンプルなら千円、詳細を知りたいなら三千円を払えば占ってくれる。もちろん、彼女の占って貰いたいことは、彼の自分への気持ち。そして今後の展開。彼女にとっては、その占い結果が当たってるかどうかよりも、内容的に希望が持てるか否か重要だった。つまり良い事を言われると、その日は嬉しい気分になって帰ることができ、ラジオへの投稿意欲も増して行く。そして数多く投稿すれば読んで貰える確立も増え、沢山読んで貰えれば、彼に自分をより意識して貰える……筈。

しかし、あまり良い事を言われぬ日は三千円を払うのも惜しくなって、財布から渋々とお札を取り出してしまふ。もう占って貰うのは止めようか…… そう思う程落ち込むこともある。まさに一喜一憂の繰り返し。目をつぶってプールを泳いでるから、全然前に進まないで同じ場所をグルグルと回っているようなもの。恋とはそういうものなのか？

この日も彼女の占い結果は、ボチボチだった。【ボチボチ：気にはしているようだが、恋心は無い】

翌月、彼女は苔丸神社に行って<おみくじ>を引くことを止めた。なんてことは無い。ただそこへ立ち寄る時間の余裕が無かったからだ。少し急いでいた彼女は、いつもの雑居ビルの階段を三階まで一気に駆け上がると、<占いの館>のドアを開けた。

「今、猫耳先生は空いてますか？」

「えっと、予約してる方ですか？」

「いえ、してませんが……」

「今、猫耳先生は他の方を占ってまして、もう一人お待ちの方がいますけど。待ちますか？」

「あ、そうなんですか…… う～ん、どうしよう……」

「もしよければ、猫耳先生のお弟子さんが空いてますけど？」

「……タロットですか？」

「はい、タロットです。どうされますか？」

「じ、じゃあ、お願いします」

猫耳先生の弟子

暗幕を空け部屋に入ると、猫耳先生のお弟子さんという男性が座っていた。

『あ、男の人……』

男性占い師に、しかもタロットで占って貰うのは初めての彼女。半信半疑で男性占い師の前に座わると、当然、視界に入る目の前の顔を見ないではいられない。彼女はチラリと男性占い師の顔を見ると、猫耳先生もいつも顔色が悪いが、彼の顔色はもっと悪かった。

それに何処か身体の具合でも悪いのではないかと心配になるほど、全体的に不健康そうに見える。占いにはエネルギーを多く使うと聞かすが、彼も恐らく修行中で多くのエネルギーを使い果たしているのだろうか？

『……なんか、頼りなさそう。てか、この人大丈夫？』

占い師が彼女にとっては初体験の男性なので、何となく好きな男性の自分への思いを知りたい、という占って欲しい内容を告げるのも恥ずかしいと彼女は感じていた。ところが男性占い師も未だ慣れていないのか、どうもかなり緊張している様子だ。

一抹の不安を抱きながらも、彼女は今更占って貰うのは止めます、とも言えず、目の前のテーブルに並べられて行くタロットカードを目で追っていた。すると、ラストのカードに＜D e a t h / 死神＞の正位置が出た。と同時に男性占い師の表情が曇った。

『あ、死神だ！ てことは最悪の結果だわ……』

何度もタロットを占って貰っている彼女にも、死神のカードの意味くらいは分かる。それよりも、結果を告げるのを気の毒そうにしている男性占い師の方が彼女は気になった。察するに、どうもダメだとは言い難いようなのだ。彼女は占い師の男性を気遣って、先に口を開いた。

「あの～ どうぞ遠慮しないで言って下さい！」

彼女の言葉にやっと、男性占い師は彼女が酷く落ち込まないように一生懸命言葉を選びながら説明をしたが、その様子が逆に痛々しい。彼女はもう二度とこの人には占って貰うまい、と心に決めて館を去った。

その後、例のラジオの彼とはナビゲーターとリスナーという関係ながら、イイカンジを保っていた。いわゆる常連さんの地位を確保し、いつもお便りをくれる〇〇ちゃんとお決まりの前置きも言って貰うようになっていた。

しかし、当然リスナーは彼女だけでは無く、彼女のライバル的リスナーも存在していた。ライバルの子は☆☆ちゃんと呼ばれて、読まれる内容からして明らかに彼女よりも年齢が若そうだ。彼女は実年を告げていないので、24歳であるナビゲーターの彼自身も、リスナーの彼女が自分よりも年上だとは想像していないだろう。それに投稿の内容からして、ライバルの☆☆ちゃんよりも自分の方が断然面白い、と彼女は自負していた。

ところがラジオの番組が始まって10ヶ月目に入った頃だろうか？ 彼女の便りを読まれる確率が微妙に減って来た。全く読まれない訳でもないが、もう一人のライバル☆☆ちゃんの回数が明らかに増えている。彼女は無意識の内に☆☆ちゃんに対する嫉妬心を抱くようになっていた。そして、3ヶ月振りに例の占いの館へ足を運んだ。

彼女はいつも予約を取らない。取らないと言うよりも、ここに来れる予定が立たないから予約が取れない。この日も飛び入りで猫耳先生をお願いした。しかし、いつも早々空いてる筈もない。この日は他の四柱推命や姓名判断の先生も全て満席で、誰からも直ぐには占って貰えそうになかった。

そこへ誰か一人の占いが済んだらしく、一室のスライド如きのドアがすーっと空いてお客さんが出て来た。その瞬間を見逃さなかった彼女は、せっかくココまで来たのに占って貰えないままに帰るのも何だかなと思ひ、受付の人に何気なく尋ねた。

「あの先生は？ どんな占いですか？」

「エロリヤーン先生ですか？ 先生は靈感占いですよ」

「あの～ 次、空いてますか？ チロリアーン先生……」

「エロリヤーン先生です！ ちょっと聞いてみますね」

「あ、すみません……」

「どうぞ！ いいですよ」

「あ、すみません…… おじゃまします」

彼女が靴を脱いで入った部屋は和室で、前に座っているエロリヤーン先生とやらの雰囲気は何かそぐわない畳に正座だ。それにとりあえずお願いしますと頼んだものの、＜靈感占い＞だと聞いて彼女は内心気が引けていた。

するとエロリヤーン先生がいきなり料金の確認をしてきた。

「一回五千円ですけど、宜しいかしら？」

『ご・ご・五千円？ 宜しくもないけど、ええ～どうしよう？』

彼女は予想外の高額にビビリつつも、じゃあ止めます！ とは咄嗟に言えないでいる。

「あの～ どんな風に占うんですか？」

「靈感よ。あなたと相手の名前と生年月日、そして住所が必要だけど」

「はあ～ 相手の名前ですか……」

良く見ると、エロリヤーン先生の着ている衣装のせい、胸元が少し肌蹴ている。全体にふっくらしているので胸元が余計目立つのかもしれないが、ショッキングピンクの付け爪がちょっとエロティックと言えれば聞こえがイイが、どっちかと言えば娼婦っぽい。

『な～んか、いやらしい感じ。てか、靈感でホントに当たるの？』

彼女は直感的にこの部屋に入ったのは失敗だったと思った。が、今更じゃあ止めます！ とは、どうしても口に出せない。

「どうされますか？」

エロリヤーン先生がほくそ笑んだ気がした。

「じゃあ、お願いします」

「五千円ですけど？」

「はい……（しつこいな）」

しかし、彼女はどうしてもエロリヤーン先生、いやこのエッチな雰囲気の人に彼の名前を告げることが出来ない、と言うよりも告げたくなくなった。

「相手の名前が分からなきゃ、正確には占えないわね。それでもいいかしら？」

彼女の口ぶりや他人を見透かしたようなふてぶてしい態度に、どうも不快を覚え始めた彼女は、今更引き下がるのも癪に障ってきたのでついつい語気を強めて言った。

「ええ、いいですよ！」

しかし数分後。なんと、占いは呆気ないほどあっという間に終わってしまった。

「【占い結果：彼はあなたを特に気に留めていない】と出ました」

「え？ あの～ それだけですか？」

「相手の詳細が分からないから、これ以上占いようがないのよ」

占いようがないも何も、その女の占い結果は彼女自身でも予想のつくような、ありきたりの内容だ。これなら、初めから占えないとハッキリ言えば良いではないか！ と彼女が今更怒っても＜あとの祭り＞。

「じゃあ、五千円ね」

<ボッタクリ！>この言葉が、その時初めて彼女の脳裏に浮かんだ。

『やられた……』

結末

僅か3分の為に五千円札が財布から出て行く。悔しさと腹立たしさと情けなさが入り乱れ、彼女は部屋を出た。すると自分の受け持ちが済んだのか、いつも彼女が占って貰う猫耳先生がカウンターで、受付の人や他の仲間占い師と歓談していた。

彼女は、一瞬猫耳先生に救いを求めるように笑顔を向け、軽く会釈をした。彼女にとっては毎回占って貰っていた先生であり、先生にとっても彼女は常連さんだと認識して貰っていると思っていた。その時までにはそう信じていた。が、次の瞬間、猫耳先生は無表情のまま彼女を見たあと、フンと鼻を鳴らしてそっぽを向く仕草をすると、其処にたむろしていた人々と甲高い声を出して笑い出した。

更にエロリヤーン先生がカウンターへ行き、他の仲間と一緒に彼女を一瞥すると、フフンといやらしい表情で笑った。

『こいつら、同じ穴のムジナか!!!』

彼女たちの裏の顔を思い知らされた彼女は怒り心頭に達し、館から無言で出て行くと二度と再び館への階段を上がることは無かった。

結局、想わぬ結末を迎えてしまった半年以上に渡る<占いの館>通い、彼女はすっかり意気消沈だったが、唯一のイベントが迫っていた。それは彼がナビゲーターとして担当するラジオ番組が終わる今月、彼女は放送日に誕生日を迎えることになっていた。もちろん誕生日であることを告げるハガキも投稿済みである。

「きっと彼は私の名前を呼びながら<おめでとう♪>を言ってくれる！いや、絶対祝ってくれる！」

彼女は信じて疑わなかった。

そして誕生日の夜、今か今かと待っていた時、彼が言った。

「今日は、いつもお手紙をくれる☆☆ちゃんのお誕生日だそうです。☆☆ちゃん、20歳のお誕生日おめでとう♪」

「え!!! ☆☆ちゃん、だけ？ うっそ…… わたしも、わたしも誕生日だよ！ てか、あの子と同じ日って……」

思えば☆☆ちゃんは二十歳。人生に於いてもめでたい年には違い無い。それに実年を告げていないとは言え、彼女はすでに28歳。彼にしてみれば、☆☆ちゃんは若くて、彼女は若くない。

とうとうその日は彼女の名前が呼ばれることは無かった。それどころか、最終日を迎えるまでも彼女の名前がラジオで呼ばれることは二度と無く、もちろん最終日にも呼ばれなかった。

それは取りも直さず、彼女の彼への恋心の終焉を意味していた。そして3年後、結局ヒット曲も無く売れなかった彼はプロダクションから消えた。タロットカードDeathの予告通りに……。

